



はじめに  
To Begin With

2

教員紹介  
Professors Interview

4

輝いている人  
The Bright Student

22

OB・OG紹介  
OB・OG Introduction

26

特集  
Feature

30

総科生101  
IAS, IGS & Senpai

33

同窓会  
Alumni Association

40

編集後記  
Editor's Comments

42

おわりに  
To End With

45

# 目次

C O N T E N T S



ひびき



# はじめに

by

# 辻学先生

「研究科長特別補佐」



# 巻頭言

『飛翔』というこの冊子のタイトル、誰が決めたのか知りませんが、大学生活をうまく言い当てている名称のように思います。

「飛翔」とは、「空高く飛びめぐること」(『デジタル大辞泉』)ですが、大学生とはまさに、これからの人生を「飛びめぐる」ために準備をする時期だと言えるでしょう。そのための様々な力を養う場所が大学です。

大学でまず養うべき力は、なんと言っても「知力」でしょう。自らを省みると、空高く飛んでいるかどうかはともかく、今の自分を支えてくれている知識は、間違いなく大学生活の4年間でその基礎が身についたものです。私の専攻はキリスト教、とくに新約聖書ですが、この分野を専攻するには、専門の知識はもちろん、外国語、とりわけ古典語の勉強が必要になります。学生時代の思い出といえば、学部の建物前に広がる大きな芝生の上に寝転んで、弁当のおにぎりを頬張りながら一人、古典ギリシア語やヘブライ語、ラテン語の単語カードとにらめっこした昼休みです。英語はもちろん、第2外国語としてドイツ語、3年次からはこういった古典語の習得が課せられていました。

ドイツ語は決して得意ではありませんでしたが、後にドイツ語圏スイス(バルン)に留学することになったので、基礎を大学でやっていたことが大いに役立ちました。英語は今でも苦心惨憺とはいえ、外国の学会に行けば否応なしに使っています。古典語は自分の専門領域で日々使う道具です。

しかし、知識は使い方によって、人を傷つけたり命を奪ったりする「暴力」にもなります。そうならないためには、自分が生きている社会や世界を見る力が必要です。自分は何のために学ぶのか、自分が学んだことをどう活かせばよいのか、その答えは、この世界を広く、様々な角度から見ることによって得られるように思います。

自分が少なからず後悔しているのは、学生時代にその力を養う機会が足りなかったことです。専門の勉強に集中はしていましたが、社会を広く見て学ぶ努力に欠けていました。それでも、2年次の夏休みに5週間、英語研修のためアメリカのダラスに滞在したことは、日本を外から見る目を与えてくれましたし、米国社会の問題、とくに人種差別を考える大きなきっかけにもなりました。

もちろん、海外に出ることだけが世界を見る機会ではありませんが、総合科学部ではそのチャンスも提供されていますし、なにより広島大学には、この世界を読み解くための大事なキーワードである「平和」という視点が強く根づいています。私たちの学びは、平和のためのどのような貢献につながるのでしょうか。この世界が平和になるためには、何が必要で、そのためにどのような努力が求められているのでしょうか。そこから、私たちが学ぶことの意味や目的も見えてくるでしょう。

高く飛び上がるためには、人間のつながり、ネットワークの力も大事です。周りの人と支え合い、助け合うことで私たちは、自分一人の力を超えた大きな働きを成し遂げていけるのですから。その「つながる力」を大学でぜひ養ってほしいと思います。自分自身も、大学で出会った先生に手を引いてもらって研究の道へ入り、留学への門を開いてもらうこともできましたし、学校で出会った友人とのやり取りが今に至るまで(最近はネットのおかげで随分簡単になりました)、仕事でも生活全般でも、自分を刺激し、支えてくれています。学生時代の課外活動やアルバイト、ボランティアなどで得られた人間のつながりが、いまの仕事や人生につながっているという友人も少なくありません。

大きく「飛翔」するため必要な力を蓄え、総合科学部からこの世界へと羽ばたいていってほしいと思います。